

山梨県総合計画審議会第1回攻めのやまなし成長部会 会議録

1 日 時 令和元年8月6日(火) 午前10時～午前11時50分

2 場 所 ベルクラシック甲府「コンチェルト」

3 出席者

・ 委 員 (50音順、敬称略)

浅野俊成	飯室元邦	風間ふたば	金丸康信	弦間明
小林公成	小林誠吾	三枝寛	坂田純恵	佐々木幸一
佐野和広	澤井實	清水一彦	進藤中	杉本安史
孕石泰丈	豊前貴子	三木徹	武藤慎一	

・ 県 側

公営企業管理者 総合政策部長 オリンピック・パラリンピック推進局長
リニア交通局長 森林環境部技監 産業労働部長 観光部長 農政部長
県土整備部長
(事務局：政策企画課) 総合政策部次長 政策企画課長 政策主幹

4 傍聴者等の数 2名

5 会議次第

- (1) 開会
- (2) 部会長あいさつ
- (3) 議事
- (4) 閉会

6 会議に付した議題 (全て公開)

- (1) 新たな総合計画の策定について
・山梨県総合計画(素案)の構成と考え方について
- (2) その他

7 議事の概要

- (1) 議題1について、資料により事務局から説明し、委員から意見をいただいた。
(委員)

私は企業経営のサイドから、若干の意見を述べてみたいと思う。大事なことは、あるべき姿（目的）であり、新たな総合計画の中にある「県民一人ひとりが豊かさを実感できるやまなしの実現」である。

私は、文中の豊かさがキーワードになっていると理解した。また、キーワードそのものが目的となる。豊かさの概念は、物の豊かさと心の豊かさの二つがあると思う。この両面をバランス良く追求していかないと、長期的に見た場合に、非常に齟齬を来すような気がしたので、冒頭に申し上げたい。

もう一つ申し上げたいのは、前回の総会の時に、長崎知事の御挨拶の中で述べられたように、2040年までを視野に入れた長期的なあるべき姿が出てくることを大いに期待する。

それは、今日、グローバル化しているが、しかしそうかと言ってローカル化も大事なことなので、「グローバルで存在感と発信力のあるやまなしの実現」であると思う。やはり外に向かっても発信していくことが重要である。是非この点を考慮いただきたい。

そして、存在感の概念は、一つめはイメージである。二つめは成長である。三つめはリターンである。リターンはステークホルダー全部にふりそそがない限り長続きしない。こうしたことも検討いただきたい。

現状分析に関する必要な視点としては、一つめは現場目線である。現場の視点で資料づくりをしているかどうかである。資料を見る限り、欠落している部分があるような気がする。例えば、最先端の情報の視点で観光を取り上げれば、最先端の情報を国でも、県でも市町村でも良いが、現場に行って収集したかどうか。ただ理論上で行動してみてもパフォーマンスは上がらない。

また、様々な産業のポジショニング、アドバンテージ、ポテンシャルティの視点での検討もお願いしたい。

政策とその考え方だが、産業分類の在り方については、観光産業、一次産業、伝統産業に加えて、他の県では真似できないような産業という意味で、障壁産業というカテゴリーと、イノベーション産業の五つに分類したらどうかと思う。

イノベーションは、プロダクト、プロセス、サービスの視点で検討いただきたい。

それから、コンセプトの在り方。これは、役割、目的、プロセス、成果、レビューといった一連の流れがない限り機能せず、短期に終わってしまう。

ここで質問だが、前県政のレビューはしていると思うが、私たちはその内容を良く知らない。それで本当に経験知が生かせるのか。新計画に経験知を利用すべきである。

プロセスの在り方については、制度仕組みでその内容はシンプルでストレートなものがよい。また、理念と目的を理解、納得したうえで妥協無く頻度の高いPDCAサイクルを回すようにしないと、パフォーマンスを上げることは難しいと思う。

さらに、アクションスピードを上げ、当たり前のことをやり切り、ベストコスト、オペレーションコストにも目配りをし、虚数ではなく実数を追求していただきたい。

もう一つ付け加えると、プロセスは文化である。山梨の素晴らしい文化を取り込

んでいくことが大事である。

最後に二つの提案である。一つめは、価値観を作成して職員全員が同じ方向に向かって目的を必意すべきと思う。例えば共有の価値観は、リーダーシップ、オーナーシップ、パートナーシップ、イノベーション、コミュニケーションのようなものである。

二つめは、行政と民間の役割分担を明確にして、お互いに追求すべきである。行政の役割は、制度、体制、環境の整備と財源の確保である。民間の役割は、絶対価値（機能、情緒、精神）の創造と、提供である。

（委員）

高校まで山梨にお世話になり、大学進学と同時に県外に出て、その後は留学も含めて海外での生活が中心であったが、そういう目線でいろいろと意見具申させていただいた。また、仕事の半分以上が、メディア・マスコミという場にいたので、そういった目線でも、山梨について意見具申をさせていただいた。

基本的に言うと、「山梨県総合計画」に書かれている内容は、非常に素晴らしく計画としては完璧だと思う。これを全部実践したら、おそらく山梨県は素晴らしい県になるなと思った。しかし、おそらくこの施策は全部できないのではないかと思う。

やはりヒト・モノ・カネなど限られた資源と環境の中で、しっかりとやるべきことの優先順位をつけてやっていかないといけないと感じた。この部会が「攻めのやまなし部会」、「攻める」ということなので、やはり守ることよりも攻めていく。徹底的に攻めていくということが必要かと思っている。

まず最初の「目指すべき本県の姿」については、「県民一人ひとりが豊かさを実感できるやまなし」。ということは全くそのとおりだと思う。ただ、このままでは県民の数自体が減ってってしまう状況の中、豊かになるのは県民だけではなく、県の企業、県自体も豊かになることが必要である。「豊かになる」ということは、勿論様々な意味での「豊かさ」という考え方もあるが、やはりしっかりと経済的に豊かに稼がなければ意味がなく、お金を稼いでいかななくてはいけないと思う。この点に絞って「攻めの部会」は集中すべきではないかと思っている。だから、「攻めの部会」というのは、「稼げる山梨を作り上げる部会」というふうに言い換えてもいいかなと思っている。ではどうやって稼ぐかということで書かせていただいたが、人口が減っている県内だけを相手にして稼ぐことは無理だろう。やはりこれから伸びていくマーケットはどこかというところ、日本なら人口増加している首都圏、中部圏、大阪圏であるが、山梨であればやはり近隣の関東圏と中部圏だろう。また日本という国自体が縮小していくということを考えると、やはり稼ぐためには国際的な視野で、海外に向けて市場を取っていかなくてはいけないと思っている。どうやって進めるべきか、ということであるが、やはり山梨県が強いところを徹底的に伸ばしてゆく。弱いところを平均値に引き上げるのではなく、今まさに強いところを「ダントツに」強くするという発想でやるべきではないか。今、山梨が世界で勝てるというところはやはり、この計画の中にも書いてあるが、精密機械産業、医療器機産業。そして

もう一つはやはり世界的なキラコンテンツ富士山を中心とした観光ビジネス。またさらにはブランド化しているワインやフルーツ等。こういったものを世界へしっかり発信して、マネタイズ仕組み作りでお金を稼いでいくという発想で、ここに集中すべきであると思う。まずはこの数年間はここに集中するというようなことをすべきではないかと思っている。

私としては、ことを成すのにポイントを3つくらいに絞り込んで実践する方が分かりやすくシンプル。なので、何か3点にポイントを集中してみる事が大事。私なりに思ったのは、世界で普通に勝てるだけでなく、「世界で断トツに勝てる」というような枕言葉をつけて目標を立ててお題目にする。例えば、①世界で断トツに勝てる精密機械産業の育成、②世界で断トツに勝っていく観光ホスピタリティービジネスの育成、③世界で圧倒的に勝てる山梨の飲食ブランドの育成など、そういった形にして、内外ともに、県民も海外の人たちもわかるようなキャッチフレーズを作って推進していく。みんなで行っていきましょうというようなことをすると、非常に動きが良くなるのかなというふうに思っている。

最後に言いたいのは、私が一番思っているのは、長崎知事は留学経験もあり米国、中国等にも人脈が豊富で国際的なリーダーで、海外への発信力もある。是非知事が、県内にとどまるのではなく、世界に向けて、知事御自身がPRパーソンとなって、上記3つのポイントに絞って、山梨はこんなにすごいことやっているのだということをPRしまくるぐらいの環境を作ることも大切だと思っている。

(委員)

私の肩書きが、三井不動産株式会社ライフサイエンスイノベーション推進部長という、不動産会社としては極めて珍しい部署の部門長やっている。何やっているのかと言うと、我が国にライフサイエンス分野において新産業が起きるイノベーションのエコシステムを作ろうということ、三井不動産が大真面目に考えていて、そこに様々な資金を投入し、私の部隊でそれをやっている。簡単に事業を紹介すると、リンクJという組織を作り、慶応大学医学部前学部長や大阪大学前医学部長に理事長、副理事長を務めていただき、ライフサイエンス関係のコミュニティをつくるということをやっている。併せて三井不動産が日本橋を中心にライフサイエンスビルシリーズとしてライフサイエンスのテナントを集めたり、最近新しいウェットラボ事業を始めた。そして三つ目の事業としてライフサイエンス系のベンチャーに投資するベンチャー投資事業と、三つを柱として事業としてやっている。今日は、本業でそういうことをやっているの、特に今回攻め山梨の中の、一丁目一番地に書いてあるメディカルデバイスコリドーというところ、それから、医療関係のところ、最後リニアについて一言ずつコメント申し上げたいと思う。

私もよく名簿を見ないで、意見を書いてしまい、なんと山梨大学の先生が3人もいらっしゃるといふのを全く忖度せずに意見を書いた。ホームページで見て、勝手に書いているので認識不足の意見で間違いがあったらお許しいただきたい。

医療機器産業集積についてということで、医療機器産業を集積するためには、こ

ういったことが必要だということを書かせていただいている。まず医療機器開発では臨床研究を集積することが極めて重要である。最も重要なのは医療研究の現場と優秀なドクターである。集積を作るためには、おそらく山梨大学附属病院の臨床研究の充実と、優秀なドクターを集めるというのがまず第一歩だと思う。そのためには臨床研究の知見、質・量ふやすために、県内外の臨床研究に強い病院を、現在の山梨大学附属病院の周辺に集積させるということから始めたら良いのではないかと考えている。例えば首都圏の大学病院の分院、特に先端医療機器センター的なものを誘致するというのも一つの手かなというふうに思っている。

二つ目は医工連携の推進。医療機器開発において、ものづくり事業と医療とのマッチングも大きなポイントで、医工連携がしやすい環境を作る。この点においては、山梨大学医学部内で医工連携センターのような、県内のものづくり企業と臨床の医療現場をマッチングする機関というものを作る必要があるのではないかと考える。これはもう、数多くの大学がやっているもので、少なくともミニマムかなと思う。これは前から私の持論だが、山梨大学工学部のキャンパスをリニアの駅前、医学部の辺りに全部移して、東京から25分で山梨大学へワンストップで集まれる場所にするということが極めて重要と考えている。

三つ目であるが、医療機器分野の選択と集中である。医療機器というのは、体温計からMRIまで非常に幅の広い産業で、一つの業界と捉えるには無理がある業界である。最大の業界団体で医機連というのがあるが、こちらの構成団体をみれば一目瞭然である。したがって、どの分野に選択して資源を集中投下するかがポイントの一つになる。また、医療機器は医薬品医療機器等法の対象となる、体の中に入る侵襲性の高い機器と、デジタルヘルスのような侵襲性のない、測るものに分かれるが、正直デジタルヘルスは、非常にライバルが多いので都心部のライフサイエンスクラスと戦うことになるので山梨ではちょっと難しいかなと思うので、時間かかっても医薬品医療機器等法の対象となる侵襲性の高い、リスクの高い機器をやるのがいいかなと思う。こちらは医学部とか連携病院等がないとできないので、こちらがいいのではないかと考える。3つ目にハブとなる組織の活用が必要である。世界中のライセンスクラスターは、必ず医療機関関係のプレーヤーが交流・連携したり、医療機器のスタートアップが集まるハブ組織というものがある。こういう産業を集積させるには、アカデミア、スタートアップ、ベンチャーキャピタル、大企業等、様々なプレーヤーが、直接会って交流できる機会が必要である。

スタートアップを産んで育てる環境が必要なので、こういった活動を担う組織と場所が非常に重要である。どうやってそういう組織を作って維持するかと考えるところが必要である。なお企業誘致のことがあまり書いていないのは、現時点で企業誘致は極めて難しいと考えているからである。

最後に、山梨が医療機器産業集積において、他の地方都市と比べて山梨が優れているところはどこかというところ、やはりリニア駅ができて品川から25分という近さで安い土地があって、富士山など自然を感じるができるということに尽きるのではないかと考えている。高名な研究者、ドクターに対して、家族を東京に残しな

がらクリエイティブで高度な研究環境を提供できれば、日本唯一の場所ということになってエース級の人材を連れてくることもできるのではないかと。

山形県鶴岡市に慶応大学の先端生命科学研究所があるが、そこに富田先生という有名な方がいらして、町ができた。そういった人材をフックにいろいろなことを行っていく。「山梨はすごいなと」思わせることが必要である。

二つ目の医療介護で県外需要の取り込みであるが、この分野で私は1点だけ可能性があるのではないかと考えている。海外からの医療ツーリズムは可能性があるのではないかと思う。特に海外、アジアからの医療ツーリズムが非常に大きくなっていて、検診とその後の治療ということにおいて、日本の医療レベル、特に中国人から高い評価を得ているので、今東京で大きな産業になりつつある。他地域の差別化はどうするのかということであるが、首都圏の有名大学、慶応大学の慶応病院等と、どうやって差別化するか。こちらでは山梨大学附属病院がキーとなると思う。山梨大学附属病院に健診センターを新たに設立して、海外で有名な教授をスカウトしてきてセンター長にして、海外から見て医療レベルが日本トップレベルに見えるという状況を作る必要があると思う。あわせて長期滞在のホテルを医学部周辺用意して、帯同家族を含めての長期滞在を可能とする。

リニア駅の開業が、富士山をはじめとする山梨の様々な観光地が直接楽しめるだけでなく、東京と名古屋に山梨から通うという、新しい、逆の発想で都市型観光ができる。そして都市部に比べて非常に安くホテルが提供できると思うので、家族の帯同、長期滞在ができるということができるとするのは、需要が高いと思う。

最後にリニア山梨ビジョンの策定である。やはりリニアの活用は極めて重要だと思っている。一番は、山梨が変わるというメッセージを国内外へ提示することができるかどうかである。そのためには今から様々な準備が必要だと思う。最後に、私の持論で毎回必ず言っているが、絶対に駅名には富士山を入れてほしい。世界中で山梨や甲府を知っている人はほとんどいない。富士山は数十億人が知っている。夕日でできる最大のPRなので、是非やってほしい。

(委員)

私は山梨に転勤してきて4年目ということで、もともとの出身は宮崎だが、ずっと転勤とか学校をいろいろ移ってきている。ここに記載させていただいていることは、的を得ていないとか、実際に山梨でいろいろお考えいただいていることも沢山あるとは思ったが、是非、私のように、来れば来るほど山梨が大好きになって、ここにいたいと思っている者、そして今日の意見の中にはうちの社員で、ずっと市民として、県民として住んでいるメンバーからの意見も集約させていただいた。一般の市民、県民が、どのようにこれを見て感じるかという視点で、御容赦いただければと思う。

全体のフレームについてと、施策とに分けて書かせていただいている。全体のフレームについては、今日も冒頭に説明があったので、そこをきちんと聞いていればよかったが、山梨成長戦略の考え方、この全体像を見ただけで書いているので御容

赦いただきたいと思う。産業の振興による県内経済の活性化、これに関しては、うちの社員もみんな全く異論はないと言っていた。ただ、その絵がとても大きいので、この場で論じる話ではないのかもしれないが、これを外に打ち出す時には、ここがゴールで、それに対して具体的な打ち手は何かということと、やはり戦略がものすごくたくさん走っていて、1個1個はすごくそうだなとどれも思うが、それらの紐づけがないと、結局、大変失礼な言い方だが、絵にかいた餅みたいになってしまうのではないかと、という意見も出てきた。また、どなたかが発言されていたが、県の限られたリソースを優先的に配分していくとなると、やはり戦略の明確性と、これだということをしちんと打ち出したほうが、より外に対しても強いPRができるのではないかと思った。

2番目、具体的な手段戦略という、ここもいろいろされているとは思いますが、ホームページなど、分からないところなりで調べたが、あんまりイメージがなかったということでお許しいただきたい。2点目に関しては、やはり最終的には、人を誘致しなければいけないということである。私も、実は4年間、小さなうちの支店ではあるが、採用をやっている。しかし、みんなやはり東京に持っていかれてしまう。山梨県出身者も。様々な街の中で話をしても、山梨、甲府も含めて、やはり仕事がない、就きたい仕事がないと言われてしまう。残念であるが。となると、やはり企業ごと誘致しなければいけない。ここは、個々の企業をやっても厳しいわけで、やはりメーカーならメーカー、そしてそれに付随する、関係する企業もまとめて誘致することで、人の血が入ってくると思っている。山梨の山梨愛をもって、県民性がある、無尽なんかもあって。それはとてもいいと思うが、一方でやはり外からの血、考え方というのをに入れていくためには、誘致をして、小中高時代から、学校の勉強も山梨でしっかりやっていくことが大事かと、すごく感じている。

誘致をしていくということになると、実際に新しい成長分野に参入していくためには、やはり商品、技術の研究開発支援というのが必要である。誰でもそれはそうだと思うだろうが、私がいろいろ見た中では、もしかしたら違うかもしれないが、山梨県産業技術センターなどがそうかなと思う。一般的に見るとそういうところと、県とが共同開発して、これぞという企業とか、産業のPRをしているとか、研究開発して頑張っているというのが、あまり聞こえてこない。最初に言った誘致と同じで、誘致する以上、企業がここに来るメリットというものもやはりあると思う。水というのがその一つだと思うが、それプラスアルファを、もっとPRしていかなければいけないのかなと思った。

3番目であるが、やはりこれから先は海外展開の支援ということになると思う。一つの企業の方が、プラットフォームをつくり、そして在庫を抱えて企業、海外に進出していくのは非常に厳しいと思う。もっと、インターネットなどを使っていかなければいけない。小口でも、例えばこちらに観光で来た方が購入したこのお財布はいいね、織物はいいいね、と言ってインターネット見たときに、ポッと個人で海外から輸入ができるような、そういうところを1企業がやっていくのはなかなか厳しいと思うので、そこを県や市区町村が連携してやっているという姿がもっとあれば

いいと思った。

最後に、これは皆さんおっしゃることであるが、本当に郡内に行くのに、やはり交通網が不便だと思う。三角形のトライアングルを作り、高速道路を作っておかないと、産業も、観光もそうだし、なかなかその発展には繋がらないなと感じている。あと、ここには書いていないが、できる限り山梨に友人知人を週末に連れてきたりしているが、来た人がみな「こんなに良いところはない」と言う。本当にいいところであるが、それが首都圏・東京などにPRされていないと感じている。私が1人で会社に言って、いいと言っても済むレベルのものではない。やはり発信、PR、アピールの仕方というところは、工夫の余地があるかなと思う。

(委員)

農業と山梨を結びつけると、先ほど委員の一人が、豊かさ、豊かな山梨というのは物心両面があるということをおっしゃっていた。それから、私のポジションから見ると、県の皆さんが作られたこの山梨成長戦略の考え方、本県の現状①、基幹産業としての製造業というものが載っているが、今、私どもの農協の組合員は県内で10万人。家族含める、これはその何倍かになる。人がそこで生活しているという基幹産業もあるのではないか。そういう視点を、多くの人が携わっているという基幹産業という考え方を、少し入れていただけないと、山梨の本当の姿が出てこないのではないかと思っている。

山梨県は、私から見ても大変すぐれた県である。まとまっているし、それから風光明媚、豊かな自然など、本当にすぐれた面がある。それから、先人が長い間培った農業。これは、今は例えば果物でも、世界のトップである。そういうプライドのもとに、これからの産業を育てていく、という考え方を持っていれば、この攻めのやまなしというのは自然と出てくるのではないか。観光と、今からは文化。日本一のもの、世界一のものがある。そういうものをしっかりと結びつけて、それをつなげていって、育てていっていただきたいと思っている。

(委員)

初めに若干自己紹介をすると、県内の公立高校を卒業して、国家公務員として20年ほど政策立案などに携わり、そのあと、個人で経営コンサルを続けてやってきて、その間にも、地方行政の部長、上場企業の取締役も経験してきた。行政と民間とで様々な活動をしていた観点から多少のアドバイスができればありがたい。

事前に意見を述べさせていただいているが、これまでも発信とかイメージが大切という話を強調される方が多かったと思う。私もその点が一番重要だと思っている。結局、政策というのは、運動論が重要であり、運動論が伴わない政策というのは、絵にかいた餅に終わることが圧倒的に多い。全体のイメージが湧きにくいもの、脈絡なくメニュー方式になっているようなものというのは大体失敗をするものである。運動論というのは、県の外も県内もそうだし、県庁職員に対してもやはり一本のイメージが発信され共有されていくことが重要で、関係する個々の人たちが共有

するイメージを持ちながら、個々がそれぞれの立場で、様々なことを自主的に創意工夫をもって推進していくことと思う。計画にそういう枠組みを提供できるかどうかということが極めて重要である。

どうしても公務員の場合、メニュー方式というものになりやすいが、なぜかと言えば、どうしても各方面からいろいろ言われる。議会も含めて様々な人が様々なことを言うので、いろいろ盛り込んでしまう。それが失敗の元になってしまう可能性が高いので、やはり骨太の、何を中心にやるか、そのイメージというものをしっかりと発信できるような立て付けにさせていただければ大変ありがたいと思う。事前の意見では記載した「山梨で元気になる」みたいな発想はちょっと陳腐だなというふうには思うが、そのような切り口があれば、ここに記載している全ての施策に通じる。全ての人がある切り口で、自分の運動を展開できると思う。そのようなことを目指してやっていただけると、ありがたいなと思っている。

(委員)

意見ということで記載しているが、まず2040年と2030年を区切りにしていうのはよく分かる。10年後20年後ということで、その直近4年間の政策を書かれていると思うが、それがどう影響するのかというのが、直近の課題で政策があると思うが、それをやっていると、2030年にはこうなる、2040年にはこうなる、あるいは、2040年を見据えてやる政策なのだよと。先ほど選択と集中という話があったが、やはり直近の課題は非常に大切で、そういうものに集中するのはもちろん大切であるが、この政策は直近ではなく、先を目指しているというのがわかりやすくなるように、県民の皆様にお知らせいただけるといいかなというのを、総合計画等を読んで感じた。

私は前回から委員をやっていて、前は産業のことを主に検討したが、今回の攻めのやまなし成長部会というのは、守備範囲が製造業、農業、森林、伝統的な地場産業に加え、観光までということで、かなり広い範囲だということを感じている。それぞれ密接に関わっているとは思いますが、実際私は機械工学科の出身なので、製造業とか地場産業に関してはある程度は知識とか意見はあるが、農業とか森林業とか、観光となると、むしろ観光はさせていただく立場だから、山梨はいいところが沢山あるよね、というぐらいしか意見がなくて、意見を求められても十分お答えできるのか少し心配である。

機械工学科の立場からいうと、学生が県内の企業を知らないというのがまず一番大きいというのはある。様々な方法で、学生に県内の企業を紹介したり、私の授業でも県内の企業を紹介したりしているが、大学では県内の学生が機械工学科だと3割ぐらい、静岡と長野が、また、2割3割ぐらいで、次が愛知の学生。愛知、静岡、長野だと、地元に戻って就職する学生がやはり多く、県内の学生も県内に就職したいという人もある程度いるが、やはり県外に、東京などに出たいという人がいて、それを考えると、大学生のときに一生懸命県内の企業紹介をしても、それほど効果がないのかと思う。先日甲府昭和高校で出張授業というのを行って、県内の高校生

に県内の有名なものづくりの企業があることをいくつか紹介したら、そのアンケートに「県内にもものづくり企業がそんなのがあるなんて知らなかった、知れてよかった」という意見が非常に多く聞かれた。やはり先ほど御意見であったが、小学校に言っても分からないかもしれないが、中学、高校ぐらいの頃から、県内にある世界的に有名な、シェアがすごい企業が幾つもあると思うので、そういうところを紹介して、山梨県もものづくりというのは、非常に盛んな県なんだというのを、よく周知することが大切かなと思っている。

あとは、医工連携の話が出たが、これも国内外に示すべきというのはまさにそう
で、実は山梨大学の医学部と工学部が連携して、医工連携をやっている。私も、ものづくりセンターというところに昨年までいたが、センターの技術職員を医学部の方に派遣して、向こうで加工できるという設備を、ここ一、二年で立ち上げた。それが軌道に乗っていて、その職員も週2日だったのが、今年は4日から1週間、まるまる行っていたりする。そして、県と山梨大学の医学部・工学部が連携して医療機器開発セミナーみたいなのもやっているが、そういうのが知られていないというのが、やはり問題かと思う。それだけ一生懸命やっているというのが、様々な人に知られることが大切かと、御意見聞いて確かに思った。

(委員)

私は山梨県で生まれて育ち、高校まではいたがそのあと県外に出て、また山梨戻って20数年住んでいる。やはり若い頃と今とでは、地元に対する思いは全然違っている。今回も、山梨がこんな山梨になったらいいなという思いと、あとは私の会社の仲間と話しながら、意見を書いた。

少しごたごた書いてしまったが、県民が感じる豊かさを得るために、というところで、今私自身が、医療、介護、理化学の分野に身を置いているので、その、自分が身を置いている「商(あきない)」という原点に立って、観光資源の有効活用、医療機器産業の集積、そして医療介護資源を活用した県外需要の取り込み、その三本について特に書いてみた。

まず観光資源の有効活用については、富士山はもちろんそうであるが、逆に富士山以外の観光資源のPR活動に、もっと力を入れたら良いのではないか。例えば、ここにバンケットホール戦略と書いたが、できれば甲府駅が良いのだろうが、交通の基幹となる拠点に大きな公共のバンケットホールがあると良いというのを非常に思っている。例えば、大きな学会をなかなか山梨県ではできない規模であるが、それは箱物がないためなので、そういう箱物があれば良いと思っている。

また、ハイクラス戦略と書いたが、県内外、また海外も含む、特に富裕層の、首都圏の富裕層とか、リッチに過ごしたい若者をターゲットとしたハイクラスなホテルが、山梨県の、特に富士山や河口湖あたりとか、北巨摩あたりに来ると、もっと人が訪れるのではないかと考える。

次に、医療機器産業の集積、メディカルデバイスコリドーについて、シリコンバレー戦略と書いているが、中部横断道の開通によって、静岡県とのアクセスが向上

する。山梨には、日本を代表する医療機器メーカーのテルモさんの工場がある。また、山梨県には中小の製造会社もあるので、医療機器の製造にとって、優秀な企業、これはグローバルな企業も含めて、リッチな誘致をしたらどうか。長崎知事がメディカルデバイスコリドーという政策を挙げているが、やはり山梨発信で医療の現場にとって患者様に有益な、医療機器を製造発信していくことによって、山梨県のプライオリティやプレゼンスも上がってくるのではないかと考えた。

最後の一つ、医療介護資源を活用した県外特需の取り込みということであるが、山梨県というのは、平成27年12月の調査によると、男女ともに健康寿命が全国一位の県である。これはなぜかというところ、色々理由はあると思うが、人々が健康で生き生き、長生きできる山梨県って素晴らしいと思う。そんな山梨だと、人々が健康で生き生き、長生きできる、そんなモデルを山梨から発信できたら非常に良いと思っている。そうすれば、そのモデルを発信できたら、山梨県に他県から、他国から、人が流入してくることも予想されるし、県民にとってもハッピーな施策であろうと思う。

あとは、先進医療の充実。やはり、健康寿命延伸ビジネスとあわせて、病気になった方のケアも山梨で手厚くできるように、山梨にも大規模病院、大学病院があるので、先進医療が受けられるような体制づくりを、より深めていく必要があると思うし、医療ツーリズムも県外、海外の方をターゲットとして、山梨県の観光と合わせて、人間ドックなど山梨の医療機関で受診していただくような体制づくりも必要だと思った。これは少しピントがずれているかもしれないが、最後に書いた、「動機善なりや」とか「近江商人の三方よし、売り手よし買い手よし世間よし」みたいな視点も考えると、みんなにとって良いような、モデルを山梨でつくれると、山梨も豊かに盛り上がって、県民も誇れるような県になっていくのかなと思った。

(委員)

私の意見はここに書かせていただいたとおりで、個別具体的にどうということはないが、二つ、感じたことを御紹介したいと思う。

まず、現状分析に関する必要な視点であるが、暫定計画、それから今回いただいた資料をそれぞれ拝見して、そこに書かれていること自体は、こういうことをやってくるのが良いのだろうと思うわけだが、これまでいただいている資料で指摘されている事項は三つに分けられるのだろうと思っている。

一つ目は、日本全国に共通するような外部環境とか課題というのがあり、二つ目としては、多くの地方に共通するような外部環境や課題があり、三つ目は山梨県特有の外部環境や課題、あるいはチャンスがあるということなのだと思う。

政策の実現に向けて具体的にどういうことをやっていくかという時に、山梨特有というものは山梨県自身で、かなりの部分を考えていく必要があるのだと思うが、全国共通とか多くの地方に共通するようなものというのは、他の県の取り組み、特に成果を上げつつあるような取り組みを参考に、山梨でも同じような取り組みをできる部分というのがあるかと思ったので、現状分析に関する必要な視点として、問

題や置かれている環境などについて、少し類型化するというのが有用なのかもしれないなと思ったというのが1点目である。

それから二つ目であるが、いただいた資料に書かれている政策や考え方については全く異論なしであるが、私の不勉強を棚に上げて、あえて申し上げるとすれば、今提案されているものは、一つ一つを見ると、従来から取り組みが進めてこられたものも少なからずあるのではないかと思っている。そういう政策の中でこれまでどういう成果を上げてこられ、残っている課題は何なのか。特に、想定どおりの成果が今ひとつ出なかったというものと、出たものと、それぞれあるのではないかと思うので、出なかったものについては、なぜ出なかったのかということについて、関係者の共通的な理解を得ることで、これまで通りやっていけばよいものと、少し目標設定や具体的なやり方、スケジュールなどを見直したほうがよいものと、新しく取り組んでいったほうがよいものと、それぞれあると思う。多少そういうところでの交通整理などを行って、関係者とも情報共有していただくと、さらに、議論が前に進みやすくなるように思った。

(委員)

皆さんの意見を聞いて、やはり県の目標（どんな県になりたいのか）をはっきりと定める必要があると感じた。関係するステークホルダーが、自分は何をすればいいかと自主的に考えられるようになることが必要だから。

キーワードとして“観光”は外せないと思う。デービット・アトキンソン著「世界一訪れたい日本の作りかた 新観光立国論【実践編】」には、“気候・自然・食・文化がそろっている場所が観光地としてはよく、日本はその全てが備わっている世界でも多くない国の一つ”であること、しかし“日本は、特に自然を生かし切れていないこと”が書かれている。“ヨーロッパの人たちをターゲットに長期滞在型観光客を呼び込め”とある。世界遺産の富士山や二つのユネスコエコパークを持つ本県は、日本の中でも非常に特徴ある県と言えるのではないか。それを強みとして、本県の観光産業を考えることも重要だと思い、本書の内容には強く共感した。

この考え方に沿って観光を考えると、私の専門ではあるが、環境保全分野、生態学などの分野の力が今後産業に結び付いてくるように感じている。富士山に観光客を呼ぶ話は何度も出たが、人が来れば必ず環境への負荷がかかる。具体的にはトイレをどうする、ゴミをどうするということをしっかりと考えておかなければならない。本県の観光政策において、このような環境保全策がしっかりとできるなら、それも売りにしてよいはず。観光客は自然に負荷をかけずに自分たちが滞在できることを知れば、安心して旅ができる（対局が開発途上国の観光地。海はきれいに見えてもホテルの汚水が流れ込んでいることを知れば興ざめである）。一時的にお金が入ればいいというのではなく、しっかりと自分たちの財産である自然環境を保全して行く対策・手だてを持っていることができれば、それが最先端の観光国といえるのではないか。（ちなみに、スイスのユングフラウヨッホには山岳鉄道があり終着点にはレストランがあった。私はそこの下水処理の実態を見学しに行ったことがあ

る。レストランのトイレは快適だったが、汚水はパイプラインで下水処理場に運ばれていた。ふもとの町の人口は決して多くはないが、処理場は観光客の下水処理ができるだけのキャパを持ったものでなければならない。スイスは景観にもうるさい国だが、あのくらいになることを目指さなければならないと思う。(ユングフラウヨッホのトイレの話は静岡県の議員のブログにも書かれていた。)

これは富士山だけのことではない。清里でもどこでも、急に人が来るようになって下水処理が追い付かず環境に負荷をかけた例はある。今となれば十分予測できることをせずに常に後追いで対策を発つるようなことは恥ずかしいことだ。環境保全を担う部局と観光開発部局は必ずペアになって観光政策を考える必要があり、山梨県に行けば環境を利用しつつも環境を汚さない・破壊しない対策が立てられているので、安心だと言われる県になってほしい。

下水以外にもインフラの整備において、常にこの県は観光県になることを意識する必要もあるのではないか。景観的にも見事なインフラの例がいくつもほしい。

また先述の書籍には、質の高い観光ガイドの必要性も書かれていたように思う。4月に放送されたプラタモリは甲府盆地を題材にしていたが、自然の面白さを上手に引き出していた。このような話は、専門家の力を借りなければ作れない。逆を言えば、山梨県内の環境関係の研究者たちの出番なのだ。彼らを県も上手に使うことを考えるべきと思う。

これに関連して、山梨県を医療だけではなく環境研究・環境教育や山岳レジャー・山岳スポーツのメッカにすることを考えるのも一つではないか(実際に著名な山岳家やアスリートが住んでいるのでは?)。様々な教育機関が増えれば学生が増える。学生という一時的な滞在人口が山梨の良さを知れば、本県のPR人材に育つ。学生(学ぼうとする人たち)を大事にする政策もあってもいいのではないか。(例えば、学生には若者だけでなく社会人も増えると思われる。その人たちが比較的安く

生活できるシェアハウスの提供、子供連れでも安心して大学に通える保育施設や学童保育の支援などがあれば、人は山梨に来てみようと思うのではないか)。

そのためには県内の大学ももっと存在感を示す必要がある。今以上の官学連携(予算面も含めた)ができてほしい。

本県の観光資源を考えると、美しい農村風景もその一つである。美しい農村風景は豊かさの証である。桃の花の咲く甲府盆地は美しい。しかしその担い手である農家は高齢化が進み、耕作放棄地も増えている。人口が減少するなら、思い切って県民総兼業農家構想(別の言い方をすれば“半農半X”という職業形態を奨励する)もあってもいいのではないか。農業が80歳代まで行えるなら、定年後も農業収入が見込める(無理をしなければ健康寿命も長くなる)。現役時代の給料は驚くほどではなくても生涯所得は低くないかもしれない(どなたか計算してみてください)。がつつ稼がなくとも豊かに暮らせる方法を人々は求めているのでは?自分たちの農村景観を守りつつ豊かに暮らせる仕事の仕方としての山梨モデルを後押しする政策を作ってほしい。

同じような考え方で、それぞれの事情に応じて労働時間を選択できるといった柔

軟な労働時間の取り方が定着すれば、子育てや介護に追われる人たちも働きやすい。ワークシェアの導入である。(県内には有能な女性が眠っている印象を持つ。テキパキと家事がこなせる家庭の主婦をもっと知的労働に駆り出して、労働生産性をあげることはできないだろうか)

(委員)

今、観光についての話があったが、私も、今一番お金をかけず、手っ取り早くて即効性のある産業は観光ではないかなと思っている。インターネットの時代で、世界中にあつという間に情報が拡散するということである。そういうもの、マスコミなどを大いに活用して話題を作っていくことが大事ではないかと思う。商工会議所では、数年前から漫画やアニメーションを活用した地域振興、それから映画のロケ地の活用した観光振興、フィルムコミッションに力を入れている。「君の名は」の舞台になった飛騨市、秩父市や大洗町などは、黙っていても日本の国内、あるいは外国からも観光客が押しかけてくるというような状況で、そういうものを活用しない手はないのではないかと思う。山梨県では「ゆるキャン△」というアニメーションが、かなり話題になって、舞台になった本栖湖とか四尾連湖、身延とか、いろいろと話題になって、観光客が増えているということである。

行政側も、こういったもののいろいろな話題提供があるわけだが、一番の成功例としては、熊本県のくまもん。それから香川県のうどん県宣言みたいなものがあるかと思う。熊本県では、知事が真面目な顔をしてくまもんを県の営業部長に任命して、その任命式をニュースで流すとか、香川県では要潤という、香川県出身の俳優をPRに使っているが、彼をうどん県の副知事に任命するなど、そういうことをやっている。行政にお願いしたいのは、そういう少し馬鹿馬鹿しいようなことだと思わずに、羞恥心を捨てて、大いに知事さんはじめ取り組んでいただきたいと思う。

それから、公平中立というのは行政の一番の基本になっていると思うが、時にはそれを捨てて一つのものに集中して、PRをしていくというようなことも大事ではないかと思う。それと、こういうものはお金をつぎ込まなくても結構拡散していくが、やはりお金をかけたものも必要で、それは先ほど他の委員からも話があった、富士山と甲府盆地を結ぶ道路の新設が一番大事ではないかなと思う。何年か前に若彦道路っていうのができて、私も一ヶ月で嫌になってしまったという、精進湖線よりももっとカーブが多い道があったが、富士山麓からやはり30分くらいであつという間に甲府盆地に来られるという。富士山の方はもうほついてもお客が来るようになっているので、そういう意味で、是非その道路について、時間もかかるしお金もかかると思うが、リニアの開通を見据えて、1日も早く、やっていただければと思っている。

(委員)

私は仕事柄、投資にまつわる調査というのもお受けすることが多く、その観点から最近の傾向などを意見申し上げられたらと思っている。先ほどからずっと御意見

等お伺いしていると、いろいろすばらしい御意見で、コンセプト的なところ、考え方のところ、それから具体的なアクションと、いくつかあるかと思うが、私としては部会で是非皆さんのお知恵を集め、なるべく具体的なアクションに繋がるような、部会からの意見を上げられたらと考えている。

それで私が今、ざっくり考えていることとして、概念的で恐縮であるが、山梨県が音頭を取って、ベンチャーを誘致するというか、ベンチャーに投資をするというファンドを作ってはどうかということを考えている。これは私の、部会の参加者としての個人的な意見だが、世の中は今、コーポレートベンチャーキャピタル、CVCが花盛りである。三井不動産も、つい最近300億円の大ファンドを立ち上げたいということで、大企業がCVCを作っておられる。これは一つには、オープンイノベーションに対する、非常に強い大企業の閉塞感というところもあるかと思うが、こういうものを打開していこうという動きは日本中にある。かたや、やはりベンチャーキャピタリストというの、非常に伸びている。これは、30年ほどかけて、日本の市場がキャピタリストを育ててきたところがあるかと思う。私は、そういったところを含めてプロの投資家を誘致して、山梨県が主体となり、ファンドを作るということをお提案したいと考えている。これは、一つには大きなアナウンスメント効果があるということである。具体的な計画のようなものをまだ作ってはいないが、もう世の中では、広島県で知事が先導して広島県のベンチャーキャピタルを立ち上げている。これは、広島の産業に投資するというので、ベンチャーキャピタルやったものだが、山梨県の場合は、東京にも近いという地の利を生かして、非常にオープンな形で、どこに本社があっても投資していくということで、プロの投資家を招聘して、県内の企業からファンドを募るといようなことを、今、ざっくりであるが、一つの提案、アイディアとして考えている。こんなことも含め、皆様の非常にすばらしい御意見を集約する中で、一つでもそういうアイディアがこの部会から出てくるといのが理想ではないかなと考えている。また皆さんの御意見を、お伺いできればと思う。

(委員)

小中と山梨に在住して、今は県外に住んでいるが、金融機関及び他県在住という観点で、少し御意見させていただきたい。様々な話が出ているが、私の方で感じていることを3点申し上げる。

1点目は、やはり、山梨県の最大の強みは、間違いなく富士山だと思っている。先ほどから富士山の観光の話はたくさん出ているが、この富士山登山鉄道構想、私は池袋で勤務しているが、池袋のお客様が大変楽しみにしている、すごい構想だということで、かなり関東の方にもこの噂が広まっている。それに合わせて、将来的にはリニアの駅ができるということで、これは逆に言うと、あまり観光誘致をしなくても、この駅ができることで、言うなればあまり観光で誘致しなくても、富士山に行く人達は莫大に増えるのではないかという、逆にそういう危惧を感じている。観光客を呼ぶのもいいが、私が今年のゴールデンウィークに京都に行った時は、金

閣寺を見るのに約3時間かかり、清水寺に行く道も大混雑で、ほとんど進めない状況であった。逆に言うと、今世界中にオーバーツーリズムという問題もある。富士山というネームバリューは世界規模で、更にリニアモーターカーの駅ができることによって、やはり富士山への混雑感というのを緩和する政策というのも大事で、同時に考えなければいけないとは感じている。様々な考え方があると思うが、やはり富士山近辺に住んでいる住民が、観光公害に合わないような政策というのも、非常に重要になると思っている。県のホームページを見ると、今はパークアンドライドなどをやっているなど、十分検討してきているかと思うが、富士山のネームバリューというのは、他県に行くと分かるが、非常に強い。埼玉県でも、富士山が見える地域というのは非常にステータスが高い地域になっているので、そう感じた。

あと2点目は、スポーツ振興に関してであるが、埼玉にはJリーグチームが二つあるが、甲府市にあるヴァンフォーレ甲府、ここの存在価値がもっと高められないかというのを素直に思っている。スタンドのある小瀬スポーツ公園は県の施設だと思ふ。すぐに強くなるということが一番ではあるが、今のプロ野球は、毎年毎年、観客動員数がどんどん上がっている。ただ、視聴率は下がっていて、競技人口も下がっている。にもかかわらず、観客動員は増えている。御存知のように、広島は松田のスタジアムであったり、楽天のスタジアムであったり、ボールパーク化といって、球場自体が、スタジアムだけではなく、家族全員が楽しめるような施設になっている。今サッカーのスタジアム見てみると、あまりそういったところを積極的にやっているところはないが、会社の関係で、セレッソ大阪辺りがサッカー場をパーク化するという政策があったり、御存知だと思うが、日本ハムなどもそうだし、北広島でボールパーク構想があったりする。そんなにすぐ簡単にできることではないと思うが、サッカーを見る人だけではなく、その中に、ちょっとしたバーベキュー場だったり、子供たちが楽しめる場所だったり、そういうものを県が作のではなく民間と共同してやっていくというのは、一つ観客動員数を上げる作戦にはなるのかなと単純に思っている。

最後三つ目であるが、先ほどもあったが山梨県の健康寿命ナンバーワンというのは、実は私の母もそれを知っていて、母の兄弟も山梨県はいいところだ、実は健康寿命ナンバーワンなんだ、という話はやはりよく出ている。ただ、やはり豊かな県民生活を送るという観点でいくと、健康寿命は、延びれば延びるほど、お金の寿命を伸ばすだけと思っている。実は、金融リテラシー調査だと、山梨はあまり高い順位ではない。金融リテラシーがあるかないかという県民性で調査をした結果だと、おそらく47都道府県では下位に近い状況ということだと思ふ。だから、健康で働けばいいが、やはり、そういった金融リテラシーで自分の財産を伸ばしていく、そういう作戦というのも、県とコラボレーションしながら、教育に取り組んだり、地域金融機関と連携して、資産の運用に対するセミナーの回数を少し増やしてみたり、そういったことを検討してもいいのかなと思った。

(委員)

先程のご意見に関して、補足させていただきたい。2016年の金融リテラシー調査では、山梨県は金融の知識・判断力を問う問題の正答率が全国47位だったが、2019年の調査では15位に上がった。この3年間、県内の金融関係者、学校関係者、県の関係者の皆様の御努力の結果、大きくジャンプアップしたということだと思っており、その点だけは、少し補足する。ただ、さらに上の都道府県が14あるということであり、おっしゃるように寿命が長くなれば、その分、お金もかかってくるので、それをどう捉えて、対応を考えていくかということは非常に重要と思っている。

(委員)

いろいろ御意見を聞いていて感じたのは、やはりこういう事業をやるためには、資源や財産が必要であるが、成長戦略の予算はどのくらいあるのか。予算がなくて議論をしても、ただ、議論に終わってしまう。

それから、山梨の強みとか言われているが、山梨県のSWOT分析をどんなふうに行っているのか。さらにこの五つの産業のSWOT分析はどうなっているのか。私たちは初めてここに来て、分からないまま議論しても、非常に的外れに終わってしまうような気がするの、そのことをお聞きしたい。

それから、これを具体的に執行する県職員が、どれだけこれに関わっていたのか。トップダウンなのか、ボトムアップの計画なのか。ここが、今後進めていく上で非常に大事だと思う。これから、今こういう形にでき上がっているものを、プライオリティの問題があって、本当に変えられるのか。変えられるものであれば、変えてもらわなければいけないが、県は発表している訳だから、変えられないということであろうか。ただ、ウエイトづけはできるかもしれない。

それから最後に、KPIとか言っているが、これは非常に大事なことで、それぞれの成長戦略の結果として、KPIが四つでも五つでもいいので、きちんと数字で出てこない限り、先ほどの稼ぐ力は出てこない。しかし、数字だけを追うことは危険も伴う。だからそこをよくバランスをとりながら、KPIを作っていただきたい。

(委員)

この場はもう、何でも発言して良いという前提で話すが、そもそも論であるが、今皆さんが話されたことは全てもっともであり、山梨県が成長していく、稼いでいくには非常に必要なことであると思うが、それを実現できるようにするためには、県民の同意、合意、コンセンサスを得ることをまず確認していかなければいけないのかなと思う。先ほどもあったが、京都市が大変な状況になっていて、主におそらくお隣の大国の観光客の方々たちがたくさん来ていて、それはそれで地元は資金的には潤っているのかもしれないが、果たして京都府民、市民にとって、それが今ハッピーなのかどうか。流れに逆行した発言で申し訳ないが、そういうことも配慮して慎重に進めていかないとなかなか、難しいと思う。県民の皆さんと、山梨を攻めていかなければいけないというコンセンサスを得ることを確認して、都度そういつ

た意味でも、具体的にこういうことをやっていくのだということを知りやすく発信することが大事。基本計画の攻めの部会だけでも22個の施策があるが、おそらく県民の皆様は全部知らないと思うし、私も全部は覚えられない。先ほども言ったが、明確にみんなが、県民の方も、県の職員の方も県外の方も、稼ぐためのお客さんになるであろう海外の方に対しても、何かスローガンの的にやるんだぞということ、山梨を取り巻く全ての人々が分かったうえで進めることが重要。そういう意味でも、県からの発信あるいは知事からの発信というものを常々やりながら、そのためにもどういったことをやっていくかを決めて進めていくことが、大切なのかなと思う。他の委員からも、この計画案はそもそも変更可能なのかと言われたのは、大事なポイントで確認が必要だが、何とか施策にプライオリティを付けてやっていく、結果を残していくということが大事なのかなと思った。

(委員)

今、他の委員からあった話に近いが、SWOT分析で何が強いのか、何が弱いのかという話は、前提としてやはり共有すべきではないかと思っている。メディカルデバイスコリドーの話は、知事がかなりやられている中でネガティブな言い方になるが、かなり難度が高いと思っている。同じようなことをやっている県では、今福島県が医工連携をやっている。それから広島県、三重県。こういう県と比べると、もう周回遅れか二周回遅れなので、本当にできるのかなと。個人的にはそう思っている。

一方強み弱みでいくと、やはり圧倒的な山梨の強みは、富士山を持っているということと、東京が近いというこの2点である。それをフックに、様々なことを考えるということが、かなり現実的な話だろうと思う。京都の話が出たが、県民的コンセンサスをつくることは大変重要だと思っている。京都は非常に、大変なことになっている。一方で、産業としてはかなり潤っている。弊社も今京都に八つのホテルを所有もしくは計画中であるが、全て高稼働なので、当然それに伴う数多くの産業的な雇用、それから建設需要、それに関連する産業が起きていることは間違いない。京都と比較するのはおこがましいと思う。十両と横綱ぐらいの違いがあるので、それは幕内になってから考えればいいかなと思っている。

あと、もう一つ。広島のボールパークの話が出たが、私どもが主導したものである。スポーツが今後、エンターテインメントと結びついて、大きな産業になると様々なところで言われている。ヴァンフォーレ甲府は、そういう面では、今J2にいますが、山梨県の人口に比較すると非常に強いし、県民のコンセンサスのあるスポーツだと思うので、おそらく生かす一つのコンテンツになるだろうということなので、オリンピック等、いろいろ県は頑張っていると思うが、そういう一連の文脈の中で、それほどお金をかけずにできる、一つの良さかと思っている。

(委員)

先ほどとは視点を変えてみたいと思う。これまでも正直言って山梨県の施策とい

うのは、多分それなりにいいことをやっていると私自身は思っている。県民もそれなりに満足しているのかなど。富士山もあって観光もそれなりであって、農業もそれなりにとても努力をされてきている。東京などでも、こんなものが山梨で作れるのかというものが、どんどん出荷されているという感覚を、私もすごく感じているところである。そういう面では、山梨は良くやっているという感覚がある。しかしその裏返しで、逆に言うと、あまり危機感がないというのも一つあるのではないかと思っている。そういう意味で、是非この攻めの部会、攻めの成長という枠組みでやるからこそ、やっぱりピンポイントでみんなが分かりやすく「これをやるぞ」というようなことを作ってもらえたら非常に良いのではないかと思っている。

最後に、実行という観点で、やはり人が重要である。最後は人。全ては人。県庁の職員もそうだし、県民もそう、全ては人である。人が計画、施策に対して、熱意を感じるか、共感するかということが、全ての成功の鍵だと思う。なので、その辺をしっかりとした枠組みとして作っていただけるとありがたい。

(委員)

専門は教育学である。先ほどからランキングの話が出ているが、県外の方々の評判、山梨は非常にいいということで、山梨にこられた支店長さんたちも、山梨はいいところと、非常にアピールしていただいている。山梨県の魅力度ランキングは大体全国の真ん中あたり、25位ぐらい。高くも低くもない。山梨県には様々な魅力があるが、最下位が何かと言うと、愛着度である。愛着度は全国で最下位。つまり山梨県人が、山梨にあまり愛着を持たないので、県外に流出してしまう。教育学の分野で親子関係の愛着度を調査すると、親子関係の愛着度が低いというか、よくない家庭はいじめが多い。いじめる子とか、いじめられる子が多い家庭の愛着度が低い。先ほど三方よしというお話があったが、親に当たるところが県とか地域で、子に当たるのは県民ということだと思う。だから、県や自治体とその子どもたちの愛着度を高めるような施策がやはり求められるのではないかと。それは、様々な考え方があるが、やはり学んで働いて生活するというのが人間の基本的な人生設計なので、特にこの攻めの部会では、働く、働ける場所、これが沢山ないと、愛着は生まれてこないだろうと思う。もちろん学ぶこと、暮らすことなども大事であるが、働ける場所を広げる、それをここの攻めの部会の、一つの達成目標だと私は考えている。

(委員)

私は工学部の土木環境工学科かというところに所属していて、交通等々の社会基盤整備や、環境保全のところを研究・教育しているところに属している。先ほど甲府盆地と郡内との交通整備、あるいは富士山登山鉄道の話とかをいただいて、やはり交通の利便性の向上というのは非常に重要だと思うので、そういう地域間の連携がますます進むというところで、きちんとした交通基盤を整備していく。これは、非常に攻めの山梨というところにも効いてくるのかなと思うので、そういうことを、計画としてもきちんと位置付けていくというのは重要かと思っている。そのときに、

一つ県の方にリクエストをしたい。富士山の鉄道とかを整備すると混雑が生じるかもしれない。様々な基盤の整備をすると、効果をもたらす一方で、影響も出る可能性もある。計画としてきちんと位置づける際には、その効果と影響をきちんとシミュレーションして、どういう効果と影響が生じるのかというのを、これは必ずしも公表する必要はないかと思うが、きちんと分析した上で、その影響があまりにも大きい場合には、それに対するケアも含め、事前のシミュレーションというのが一つ重要なかなと思った。そういうことを踏まえて、きちんと計画として、盛り込んでいくということが重要かと思った。

あと社会基盤というところの話で言うと、中部横断道が2020年に開通というところで、そういう社会基盤がきちんと整備されるというところ。これについては、山梨県も今まで力を注いできた結果だろうというところで、次はやはりそれをいかに活用していくか、うまく使っていくかというところが重要かと思う。そういう意味で、社会基盤をうまく使っていくために、攻めのやまなしというところで、計画をきちんと組み立てていくというところが重要なかなと思った。その時に、雇用という話があったかと思うが、そういうことが、社会基盤につなげるというのが重要かと思う。

この場に皆さん民間企業の、非常に御活躍されている方々の前で申し上げるのも気が引けるが、民間投資をきちんと呼び込む、ファイナンスをきちんとするという話があったが、そういうところは非常に重要なかなと思っている。その時に、投資に関わるリスクがやはり発生してくると思うので、それを公的機関が引き受けるというのはもちろんよろしくないと思うが、ただリスクがあってもなかなか投資を躊躇するというところもあるかと思う。例えば、その場合も単独で企業の投資となると、なかなか難しい。それは当然だと思うので、そこは、いくつかの企業が連携するとか、いくつかの地域で連携するとかという形で、リスクを低減させるというか、そういう環境づくりなどは、やれる余地があるのではないか。そういうところに、いろいろ知恵を出して、リスクを完全に引き受けるという訳ではないが、工夫によってリスクが低減するとか、そういうところをうまくこういう中に盛り込んでいただくと良いと思った。

それから観光面であるが、これも非常に重要だと思う。今の民間投資のような話と絡めると、産業観光と言うのだろうか。MICEという、新しい観光というものが登場してきている。産業観光である。我々は、学会等で様々なところに出かけるが、産業間での交流と観光も絡めてやるというようなこと、産業の中での交流というのに、一石を投じてそこから交流が深まり、情報が共有化されて、山梨県にも投資しよう。そういうことにも繋がるかと思う。観光と言うと、どうしても、プライベートの観光というところに、目が行きがちなのが、そういう新たな部分もあるのかなど。なので、そういうところにも、目を向けることによって、そこからより広がりが出てくるかもしれない。ということで、少しお話させていただければと思った。

(委員)

今、山梨には宝がいっぱいある。先ほどから言われているように、社会インフラとして、新たにリニア中央新幹線、中部横断自動車道、新山梨環状道路、さらに小仏トンネルの拡張計画もあると聞いている。そうした意味では、山梨県庁はものすごく努力して、いろいろと環境を変えている。新しい社会インフラを作っているといった評価が、私たちには全然伝わってこない。こんなに山梨県庁は頑張っているのだということが分かるようにすべきである。このようなことを発信することで、県民や県人の皆さんは、「そうか。県庁がインフラのことをそんなにやってくれたのだから、私たちのやるべきものは何か」ということになる。これこそ、自分たちは絶対的価値の創造と提供に一生懸命努力することになる。

この価値づくりも、高付加価値化すると同時に、ブランディングを真剣に考えていかないといけない。さらに、それには人材の育成が必要となる。

そうした意味で課題を解決していくのには、縦割り組織にどのように横串を刺していくかということを考えるべきである。

官庁は大体みんな縦割り組織だからなかなか改革ができず、パフォーマンスが上がらないように思う。

今日多くの委員の皆様からの御意見を聞いて、多分いろいろ改善されことと思う。このことを是非お願いして私の最後の意見としたい。

(2) 議題2について、総合計画審議会の今後の日程を事務局から説明した。